



Title	北村清彦（編著）『北方を旅する：人文学でめぐる九日間』
Author(s)	笹倉, いる美
Citation	北方人文研究, 4, 95-97
Issue Date	2011-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/45285
Type	bulletin (article)
File Information	SASAKURA.pdf



[Instructions for use](#)

<書 評>

北村清彦（編著）

『北方を旅する：人文学でめぐる九日間』

札幌：北海道大学出版会，2010年，255頁

笹 倉 いる美

北海道立北方民族博物館

本書は「アテンション・ブリーズ」と題された前書きからはじまる。自分をツアーコンダクターであると紹介する編者が用いた、飛行機内でのアナウンスの際に使われる句が、「九泊十日」の旅立ちを意識付けている。

北海道大学文学部・文学研究科が、平成19年に9回にわたって開催した、公開講座「北方を旅する—北をめざした人々」をもとに再構成したのが本書である。北大文学研究科ライブラリの二冊目ともなっている。

章立ても一日目、二日目といったぐあいで、前述したようにことさらに旅を意識した構成になっている。ここまでののなら、この一種の遊び心を表紙にまで届けてほしかったようにも思うが、極光のさす暗い海面を飛ぶ一羽のワシ。北方の旅のイメージではあるのだろう。



目次は次のとおりである。

- 1 日目 チューホフと旅へ：一九世紀末のサハリン 望月恒子
- 2 日目 遠い地平線の絵画：ロシア極東とサハリンの画家たち 谷古宇尚
- 3 日目 エルミタージュ美術館案内：帝政ロシアが実現した西欧世界 北村清彦
- 4 日目 現地調査の旅：アイヌ語の場合とニブフ語の場合 佐藤知己
- 5 日目 北方の言語を旅する：失われゆくことばの多様性 津曲敏郎
- 6 日目 鳥居龍蔵と東アジア：歴史学説と心象地理 吉開将人
- 7 日目 お札博士の東アジア行脚：人類学者フレデリック・スターの東アジア調査資料から
- 8 日目 動物たちの旅と北方狩猟民：動物資源の賢い利用 池田透
- 9 日目 旅する人類の考古学：草原とツンドラの彼方へ 加藤博文

添乗員（講師／執筆者）はすべて北海道大学文学部・文学研究科の教員であり、公開講座の対象は一般市民である。

また本書の特徴はこのツアー全体のなかにさらに旅が組み込まれていることである。いわば旅の入れ子。ロシアのマトリョーシュカ人形を思わせる。

北方に関するテーマを紹介するだけでなく、実際の北方への旅もまたテーマとされている。例えば、1日目のチェーホフ、6日目の鳥居龍蔵、7日目のフレデリック・スターの旅がそれである。

村上春樹の『1Q84』が契機となり、チェーホフの『サハリン島』にも脚光があたって新訳版も発行された。望月はチェーホフを30歳の青年という視点で捉え、「青年はサハリンで何をしたか」「青年はサハリンで誰とあったか」と問う。誰というのは、具体的な個人名でもあり、集団としてのサハリン住民でもある。サハリンでチェーホフがおそらく8000名以上の住民調査を行ったという記述は興味深い。望月が撮影したアレクサンドロフスク・サハリンスキーのチェーホフ像には若さがみられない。晩年の姿を模したのではとも思うが享年でも44歳。30歳にしてロシア帝国で名声を確立していた青年の意味は、今と当時では違っているのだろう。

フレデリック・スターはそう知られた名前ではない。宮武も「忘れられた人類学者」と紹介するほどである。1904年に開催されたセントルイス博覧会に、9名のアイヌを連れて行った人物であるが、この件については宮武の別稿を参照されたいということで、軽くふれるにとどまる。約30年間にもわたり日本の隅々を旅行し、資料を集めたフレデリック・スターの逸話は楽しい。しかしその数千点に上るスターの個人コレクションは散逸してしまったという。この出来事を宮武はダンカン・キャメロンが言った、「テンブル」と「フォーラム」という博物館の二つの在りようからの解釈を試みる。

旅に芸術はつきものである。普段美術館へ足をふみいれない人でも旅先では、ルーブルへ、ウフィツィへ、メトロポリタンへとなる。2日目はロシア極東とサハリンの美術を、3日目はエルミタージュ美術館を紹介する。

ロシア極東の美術を谷古宇は、美術館のカタログ文のような筆致で提示する。シカチ・アリヤンの岩絵をナナイのと形容するのが妥当かどうかはともかく、北方民族の意匠がモチーフとされ新たな美術作品が生み出される例も紹介される。この章に登場するナナイの作家アナトーリー・ドンカンの作品は北海道立北方民族博物館にも所蔵されているが、彼の魚皮作品にはパートナーであるオノデラ・マリレイの名も欠かせないだろう。ソ連、ロシアの美術作家たちと北方領土、千島列島の関わりあいは、ソ連、ロシアにおける北方領土、千島列島の立場を位置づけることにつながっているという指摘は、北方領土問題を考える際の一つの示唆ともなっている。

言葉もまた旅をする。外来語というものがあることから、それはわかる。4日目は近場のアイヌ語とニブフ語を、5日目はもっと広く北方の言語を旅する。そして、8日目には動物の北方への旅が、9日目には人類の北方への旅が紹介される。

ホモ・サピエンスは一体どこから北方への旅に出発したのか。その解明にはアクセサリーの解析が不可欠だと加藤はいう。なぜなら装身具は、自分の帰属意識や、自分の感情を表現する社会的道具であるからだという。そして現在最も古いアクセサリーは、南アフリカの約7万5千年前の貝製ビーズであるらしい。ではアフリカが出発地として、シベリアへはいつ頃進出したのか。約4万年前にはシベリアまで到達していたという。約2万3千年前に、60人程度が暮らしていたシベリアを代表するマリタ遺跡からは、多くの道具類と動物骨が発掘されている。特にトナカイとホッキョクギツネの骨が多いことから、トナカイは北方諸民族と同じように、肉は食料に、毛皮は衣類や住居に、角は各種道具の素材に使われ、ホッキョクギツネはもっぱら毛皮利用されていたと推測される。人類の北方への旅は、豊かな動物相の存在が伴っていることを示している。

本書のさらなる紹介のために、各旅がどのように締めくくられているのかをあげてみよう。

- 1 日目 チェーホフと旅へ 「たくさんのチェーホフ像は、若い作家が一人でこの島を訪れたことの意味について、私たちに永遠に問いかけてくるように思われる」
- 2 日目 遠い地平線の絵画 「移住者にとって、そこは旅の終わりの場所である。しかしふたたび旅立つ場所となるかもしれない」
- 3 日目 エルミタージュ美術館案内 「まあ一日で見て回ろうというのが無理な相談というものであり、興味の種は尽きないが、また次の機会に譲ることにしよう」
- 4 日目 現地調査の旅 「旅をしなければ（私は）もっとひどい人間のままであったろう。可愛い子には旅をさせよ、というのは万古不変の真理だ、と一人納得している」
- 5 日目 北方の言語を旅する 「北方の言語世界に興味をもった方は、次のようなガイドブックで、新たな旅をめざしていただきたい」
- 6 日目 鳥居龍蔵と東アジア 「筆者の研究も、今はまだ長い旅の出発点に立ったばかりである」
- 7 日目 お札博士の東アジア行脚 「現代こそ、モノそのものの価値や関係性を重んじた、スターのような「敗者の近代史」を再検討する意味があるのではないだろうか」
- 8 日目 動物たちの旅と北方狩猟民 「あまりにもつたない旅の案内人であったが、少しでも動物と人間との関係の理解促進にお役に立てたならば幸いに思う」
- 9 日目 旅する人類の考古学 「私の旅は今も続いている。ただ、未だわたしには、連れ添うイヌがないのではあるが」

そして、編者の後書きは、「お疲れ様でした」と題されている。

各所には、読者の旅を助ける地図が付されている。ツアー全体をひとまとめにした地図があってもと思うが、扱っている時代が異なることから、それが難しかったことも理解できる。ただ索引がついていなかったことは惜まれる。

本書が読者にとって、さらなる旅の契機となることを、添乗員たちは望んでいることだろう。